



石狩、浜益濃昼行

エッセイスト
川口 祐二



国道231号線、浜益村役場近くの停留所。



十月二日、石狩の野は早くも秋冷、草もみじの野面、国道231号線をバスが走る。9時10分、札幌発の「日本海るもい号」である。私は浜益村をめざした。濃昼に住む女性、木村良子さんに会うためである。

約束の時間の都合上、役場のある浜益まで足を延ばした。乗客は僅かであった。整備された道路が北へと続いていた。日本海からの風が強く吹いて、ひとしきり時雨れた。はるばる来たぜ浜益へ、と変え歌が口を突いて出る。雨の降る広びろとした道路に立った。ふと、斎藤茂吉の歌集『石泉』の中の、何首かが思い浮かんだ。

かきくらし雲ひくきなべに川浪の

立てるが上を鳥いそぐ見ゆ

トンネル 隧道をいでて明るき峡の空

部落のうへに海の潮みゆ

昭和7年、石狩などを旅したときの連作の中から二首。

濃昼はひっそりとした集落であった。玄関に訪ねる人が立っていた。

「浜益は以前は不便な村でした。道のない村といってもいいような所でね。山道を歩いて暮らしていたんです。私は川下から濃昼のニシンの網元へ嫁いで来ました。そのときも、毘砂別から細い道歩いて来たんです。荷物は天気の良い日に船で運んでね。嫁に来たのは、昭和27年だったから、そのころはまだニシンがとれてとれてね。しばらくしてとれなくなつてからは、小さい船買ってタコ取りました。木の箱でね。箱に穴あいていますね。そこを棒つこで突いてタコ出すんです。棒つこで突くとタコでてくるの。」



当時はね、箱50入れたら、全部にタコ入っていたね。川下から仲買人が買いに来ていました。トラックに積んで持って行くんだけど、七曲りで坂道だし、砂利道で揺れるから、タコ、トラックから落ちてね、山の中の道歩いていた、という話があるの」

僅か15軒ほどの場所に、立派なニシン番屋が建っている。見事というしかない。明治30年に津軽から来た

大工が苦心して建てた。その番屋へ、良子さんは嫁いで来たのだった。番屋は和洋折衷の建物で、塔のように見える応接間のポーチと屋根は、まるで、チェーホフの芝居の舞台装置そのままといってよい雰囲気醸し出している。

番屋の前を広い道路が走る。以前は狭い道であったろう。ニシンを山と積んだ道であった。海辺の人びとの暮らしとともにある一本の道、それは小さな港に向かって延びているが、果ては人家と荒海とを隔てる高い堤防で途切れていた。



濃屋の集落に今も残るニシン番屋。
和洋折衷のデザインは100年以上たった今も新鮮だ。



浜益村濃屋ニシン番屋の前の道。交差点はないが、暮らしとともにある北の道である。

「一日に2,000万円の水揚げをしたこともあったのに、ニシンとれなくなってからはね、うちの父さん、漁の合間には道路の人夫しました。時代が逆転したんだべき、とよく言っていたですよ」

国道231号線が開通するきっかけは、濃屋の小学生が、早く道路が良くなればいいなあ、と視察に来た道庁の職員たちの前で、作文を読んだことによる、と良子さんは昔話をして

くれた。のちに、北海道知事になる堂垣内さんが、「わかった、必ず道路をつけてあげるから」と子供たちに約束したのである。

その日は午後風が吹き、時雨が人気のない村を濡らした。港の堤防に波しぶきが弾けた。強風の中を赤岩トンネルが望める岸辺まで歩いた。荒波が岩を咬んでいた。何台ものトラックがトンネルの中へ吸い込まれていく。

国道231号線の海岸沿いの区間には、トンネルが多い。長いのもあれば短いものもある。まさにトンネルの見本市である。それぞれ掘削された年代が違うから、自ずと規格も異なる。

帰りは厚田あつたのバス停まで送るという息子さんの好意に甘え、夜の国道を走った。

「赤岩トンネルはもう古いですよ。トンネル内の壁面のふくらみが少ないから、トラックが中で行き違うときなんか、壁に当たってね。壁があんなに怪我しているでしょう」



日本海の荒波に洗われる国道231号線、赤岩トンネル入口遠望。

この人のいう通り、壁にはトラックによる擦り傷こすが痛々しい限りである。木村さんにとっては、毎日走り抜けるトンネルである。怪我している、と自分の分身のように親しみを込めて言う。その言葉に、海辺の人の心のやさしきを感じた。

覆道がある。トンネルのようであって、片側からは海が覗ける道である。覆道というのも、どこか北海道らしい言いまわしだ。二つのトンネルを継ぎ足して一つにしたのもある、と運転者は言う。

「もうじきそのことが分かりますよ。継ぎ目のところに海側へ出られる窓のような出口があるから」



時雨に濡れるトンネルを出れば映の空。小さな集落と日本海が見えた。

私に乗せた車は、その丸く仕切られた出口を、一瞬にして後方に置き去りにした。

今年3月に新しくなったばかりだという長いトンネル(滝の沢トンネル)をくぐった。上下左右ゆったりとした空間である。すこぶる明るい。両側には歩道もある。年に何人の人が歩くのか。石狩から浜益までのこの道に、人の歩く姿はなく、自動車専用という感じきりであった。北海道の暮らしの形態がそうさせるのだろう。

厚田からの帰りのバスも、乗客は私一人であった。運転手は発車まぎわまで、タバコをくゆらせていた。ただ一人の客に向かって、問わず語りに言う。

「もうすぐ山が黄色くなってきれいですよ。私たちバス運転手の何よりの幸せは、北海道は道がいいことですね。眺めがいいんです。道が周囲の風景に溶け込んでいます。十勝の方へ行けばもっといいですからね」

つまり、道が風景を作っているということなのである。風景の核として道がある、それが北海道のすばらしさといえるのだ。運転手に冬はどうです、と訊けば、それは大変ですよ、とひとこと答えた。

雪が降るからだろう。積雪が道幅を狭める。同じ道でも、夏と冬の使い勝手に差があるのは北海道の特色、いわば、それは北の国の宿命ともいえる。

「今のよう^{おくりげ}にいい道がないころはね、冬なんか、送毛の坂の上から、尻に笹を敷いて滑り降りて、濃昼まで帰ったこともありますよ。穴滑り^{けっ}といっていましたね」

元気な声で話した木村良子さんの語り口が、バスの運転手の声に重なる。

暗闇の石狩の野を1時間ひた走って、やっと前方一面に、札幌の雨の夜の光が見えた。



三重県、五ヶ所浦の自宅にて執筆中の川口さん

Profile プロフィール
エッセイスト 川口 祐二

かわぐち・ゆうじ 1932年三重県生まれ。70年代初頭より農村から合成洗剤を無くす実践運動を展開。88年、岩波新書の「私の昭和史」に採られた「渚の五十五年」が反響を呼ぶ。日本の漁村を歩き、海辺の環境や暮らしの変遷を書き続けている。01年、環境保全活動に対して田尻賞受賞。現在、NHK農林水産通信員、環境省委属自然公園指導員。海の博物館(鳥羽市)評議員。著書に「遠く遊く人ー佐多稲子さんと縁」(ドメス出版)「苦あり楽あり海辺の暮らし」(北斗出版)など多数。新著は「渚ばんざいー漁村に暮らして」(ドメス出版)

